

轟 朝幸・引頭雄一＝編著

災害と空港

— 救援救助活動を支える空港運用 —

2018年2月発行
 本体2,800円＋税
 成山堂書店
 ISBN 978-4-425-86301-3



高田和幸
 TAKADA, Kazuyuki

東京電機大学理工学部教授

多くの痛ましい犠牲を伴った東日本大震災から既に7年が経過した。その後も熊本地震、大阪府北部地震など、強い地震が日本各地で発生している。震災の発生後には、被災地の調査、災害発生機構の検証、対策の検討、施策の実施がその都度図られている。自然災害の大きさは、外力であるハザード（地震、津波、台風など）の大きさと、そのハザードに対する社会の脆弱性を掛け合わせることで決定される。そのため、次に大きな外力が社会に加わる前に、どれだけ社会の脆弱性を改善できるかが防災・減災の鍵となる。かつてより日本では自然災害の経験を通じて、ハザードに対する備え（脆弱性）を改善してきた。本書籍は、まさに発災直後より救援救助等の活動において重要な役割を担う空港の運用に係わる脆弱性改善のための提言書である。

本書籍は3編で構成されている。第1編「実態調査編」では、大規模災害時の航空と空港の役割および空港運用に係わる組織・体制、東日本大震災時の3空港（花巻空港・山形空港・福島空港）の利用状況、3空港の広範にわたる関係者へのインタビュー調査の記録で構成され、大規模災害発生時の航空の重要性とそれを支える空港の役割、また明らかとなった課題が整理されている。第2編「研究調査編」では、第1編で得られた知見を踏まえて、大規模災害時の空港運用上制約となり得る「空港容量」と「航空機の待機時間」、「空港と場外離着陸場との連携の方法」、「防災拠点空港に必要な機能の配置」に関して、それぞれ工学的なアプローチに基づき施策の評価がなされている。第3編「提言編」では、「大規模災害時の空港運用のあり方」と「災害時の空港運用にも配慮した空港整備のあり方」について検討され、今後の大規模地震（ハザード）に

対する備え（脆弱性の改善）が提言されている。

ここで、本書籍の読者ターゲットについて言及しておきたい。本書籍のタイトルは「災害と空港」であり、対象領域が限定的と受け止められ、読者層が航空や空港の関係者に限られることが想定される。しかし、航空や空港の関係者のみならず、分野を問わず防災・減災に携わる可能性のある方、また組織の中で緊急時対応に関わる可能性のある方には、ぜひ目を通して頂きたいと思う一冊である。というのも、ハザードに対する脆弱性を改善する施策には、大きくハード面とソフト面からのアプローチがあるが、東日本大震災等の調査・検証を通じて、本書籍には、(1) 物理的条件が満たされていたとしても、ソフト面（例えば、情報の伝達）でボトルネックが生じると救援救助活動が滞ってしまうこと、(2) 関係主体が広範に及ぶ場合でも、関係主体間のコミュニケーションを通じて、各主体の「災害対応」について相互に理解を深めておくことで、円滑な救援救助活動が可能になること、(3) 経験を通じた事前準備と訓練の大切さなど、ソフト面の脆弱性改善の重要性理解に繋がるからである。

平成30年6月29日に防災基本計画（内閣府中央防災会議）が修正され、「各災害に共通する対策編」に記載された多くの計画に「実効性の確保に努め、」という文言が加わった。このことを受け、今後、各行政機関・地方自治体・関係諸機関においては、実効性の確保という観点から防災計画が点検されることになるであろう。本書籍に記された提言は、まさに実効性を高めることに結びつくものである。運輸政策に携わる「運輸政策研究」の読者の皆様には、ぜひ一度手にとってご覧頂きたい。